

Using Sight Word Reading in Foreign Language Activities at Elementary School to Familiarize Pupils with the English Letters

教科・領域教育専攻

言語系コース (英語)

段本みのり

指導教員 畑江 美佳

I. 研究背景及び研究目的

現行の小学校外国語活動では5、6年生を対象に「聞くこと」「話すこと」を中心としたコミュニケーション活動が展開されている。小学校学習指導要領における外国語活動の目標は「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーションの素地を養う」ことである。アルファベット文字は「コミュニケーションを補助するもの」として扱われ、積極的な文字指導は行われていない。

2014年12月、文部科学省は「英語教育改革実施計画」を発表した。その中では、正式に「教科」として取り扱うことや5、6年生の目標に「読むことや書くことを含めた初歩的な英語の運用能力を養う」ことが内容に盛り込まれている。小学校外国語活動の教科化に伴い、文字が導入されることは避けられず、どのように文字が導入されるべきかについて早急に検討しなければならない。

現在、小学校で行われている文字の指導には英語絵本の読み聞かせやフォニックスなどの活動がある。一方、その他の指導として、サイト・ワード・リーディング (sight

word reading) について言及している研究者もいる。そこで、小学校における新たな文字の導入として、サイト・ワード・リーディングの活用について考察する。

本研究の目的は、小学校外国語活動において、児童の文字の慣れ親しむためのサイト・ワード・リーディングの活用やその効果を探ることとする。

II. 研究の概要

第1章の序論に引き続き、第2章では先行研究をもとに小学校外国語活動における文字の指導の重要性及びサイト・ワード・リーディングの有効性について述べる。

Krashen (1986)は、言語習得において「聞くこと」「読むこと」のインプットは重要であり、「読むこと」は「書くこと」だけでなく4技能を含む全体の能力向上に影響を与えると述べている。また、岡・金森 (2012)は、音声に十分にふれた上で英語の文字を導入すれば、文字を通して英語の音声に対する気づきがなされるとしている。

つまり、言語習得に関して「読むこと」のインプットは4技能全体の向上を促す役割があることから、インプットの重要性があることがわかった。また認知発達観点からは、高学年児童が文字に対して興味をもつことは自然であり、十分な音声に慣れ

親しみの後で文字を導入することが気づきにつながるとしている。このことから、外国語活動において文字を導入することは必要であると考えた。

サイト・ワードとは、Dolch によって選出され、子どもたちが流ちょうに読むことができるために必要な単語である。同様に、サイト・ワード・リーディングとは、流ちょうに読むために必要な多頻出単語の知識を教えることである。また、サイト・ワードにはフォニックスのルールでは読むことができない不規則な単語が多く含まれている特徴がある (Beech, 2003)。それに加えて、アレン玉井 (2010) は、フォニックスの学習がある程度進んでからサイト・ワード・リーディングを導入すれば、読むことへの効果が期待できるとしている。

第 3 章では、鳴門教育大学附属小学校で 6 年生を対象にサイト・ワード・リーディングの実証実験を行うこととし、児童の文字に対する情意面やリスニング、リーディング能力に影響するのかどうかについて考察する。

アンケート調査の結果、サイト・ワード・リーディングの活動前と活動後で、情意面 6 項目すべてに有意差が認められた ($p < .01$)。中学校の学習を意識する 6 年生児童の「読むこと」への意欲が、サイト・ワード・リーディングの活動を通してさらに高まったと考えられる。

さらに、リスニングテストの結果からは ⑤ “fly” ($t = -4.716$, $p < .01$) と ⑥ “with” ($t = -2.923$, $p < .01$) に有意差がみられた。サイト・ワード・リーディングを通して、フォニックスのルールに当てはならない音と綴

りの関係をもつ単語の文字認識を児童に定着することができたと考察した。

また、リーディングテストの結果からは、6 問中 5 問に有意差が認められた ($p < .01$)。サイト・ワード・リーディングの活動が単に文字を音声化するだけではなく、意味を伴った読みを促すことができると考えた。

鈴木・門田 (2012) の心的言語表象の図式を用いるなら、音韻表象と文字表象をつなぐルートが形成され、意味を伴った読みに結びついたと考えられる。

小学校外国語活動では、英語の音声から入ることが前提であるが、高学年になると文字に対し自然に興味をもつようになる。小学校の文字を使った指導として、絵本の活用やフォニックスだけではなく、サイト・ワード・リーディングの活用も可能ではないかと考える。

III. 今後の課題

本研究では、サイト・ワード・リーディングの活用が児童の文字に対する情意面やリスニング及びリーディング力に影響を与える一つの要因になることが明らかになった。

しかし、今回の調査結果は限られた期間の中で得られたものであり、サイト・ワード・リーディングの効果が十分にあったとは言えないであろう。これからさらに継続した研究が必要であると考え。今後、「読むこと」だけでなく「書くこと」も含めた活動も視野に入れて研究を継続していきたい。